

令和元年12月21日(土)

### 早くこいこいお正月 その1

3年生の君たちにとっては、早くこいこいお正月ではないはずだ。できれば、あと3か月くらい待つてほしいのが本音だろう。でも、間違いなく時は進んでゆく。この大きな時の流れの中で、自分の時間の密度を濃くしていくことが大切だ。

かつて、中国では、「君子は豹変す」という諺が語られた。君子は豹変すとは、徳の高い立派な人物は、過ちに気づけば即座にそれを改め正しい道に戻るものだということを表現した。また、状況によって態度や考えを急に変えるものだというたとえでもある。

また、『三国志演義』が出典で、「男子、三日会わざれば刮目(かつもく)して見よ」という慣用句がある。原文は呉(ご)の武将(ぶしょう)呂蒙(りよもう)の故事から出ている言葉である。

こんな逸話(いつわ)であった。

呂蒙という人は、呉王(ごおう)孫権(そんけん)に度々重んじられてきたが、家がもともと貧しく、学問に触れる機会もなかったこともあり、武力一辺倒で学問に全く興味のない人であった。

そのため、書類なども自分が話した内容を聞き取らせて、部下に作成してもらっていた。そんな呂蒙の学識のなさを笑って、人々は、「呉下の阿蒙(ごかのあもう)」とからかっていたのだ。「阿蒙」というのは、今で言う「蒙ちゃん」といったニュアンスで、さげすんだ言い方ではなく、親しみを込めて、「おぼかな蒙ちゃん」的な感じでからかっていたという。

そんないつまでも「阿蒙」のままの呂蒙を見かねた呉王孫権は、呂蒙に学問を勧めたが、はじめのうち呂蒙は「軍中は何かと忙しく、書物を読む時間を取れない」と言い返しているばかりだった。

しかし、孫権は「博士になろうとしなくていいから、歴史を見渡して見識を広めてみてはどうか」と、どの書物を読んで学ぶべきかを教えたともいう。国王にそこまで言われたら、やらざるをえないのは当然である。呂蒙は発奮して、勉学にも本腰を入れ、やがて本職の儒学者たちをものぐさほど読書をし、勉強を続け、見る見るうちに教養を身につけた。

勇猛（ゆうもう）なだけで無学であった呂蒙を軽蔑（けいべつ）していた知識人の魯肅（ろしゅく）は、日に日に上がる呂蒙の評判を聞いて挨拶（あいさつ）に向かう。実際に語り合った呂蒙は、以前とは比べ物にならないくらい豊かな学識を兼ね備えた大人物へと成長していたという。

おどろいた魯肅は、「昔言われていた『呉下の阿蒙』であったとはとても思えない」と称賛（しょうさん）した。これに対して呂蒙は「士別れて三日、即（すなわ）ち更（さら）に刮目（かつもく）して相待すべし」、つまり「士たるもの、別れて三日もすれば大いに成長しているものであって、また次に会う時が目をこすって違う目でみなければなりませんよ」と答えたという。

人間だれもが能力を持っている。外見からはわからないほど、色々な能力をもっているのである。この慣用句も、三日間というわずかな時間でも人間は変わることができるということを言っているのだが、この呂蒙の逸話から、みなさんには3つの大切な事を伝えたい。

一つは、孫権が呂蒙に学問を勧めたこと。つまり、変わるための「きっかけ」があったということ。

一つは、呂蒙が変わることができたのは、変わるために勉学に励むなど努力を続けたということ。つまり、人は自分の考え方や行いを「変える」ことで、変わるんだということ。

一つは、呂蒙は、自分のためを思って言ってくれる孫権の言葉を「素直」に受け入れたこと。

つまり呂蒙は、孫権の言葉を「きっかけ」に、「素直」にその言葉に従い、自分を「変える」ための努力を惜しまなかったことで大いに成長できたのだ。

『士別れて三日、即（すなわ）ち更（さら）に刮目（かつもく）して相待すべし』と高らかに言うことができる時間を、まさに今過ごしていることを忘れてはならない。

できなかった自分は、三日もあればできる自分になり、できる自分になれば、できない自分など、いなかった如くなるのである。その繰り返しを継続するところに、成長があると考える。頑張れ、諸君。

三日もあれば、偶然は当然に変わる。さらに三日あれば、当然は必然に変わり、必然は、勇気と闘魂を生む。高い志と熱い魂をもって、乗り越えるぞ、諸君。